
革命者

キング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

革命者

【著者名】

キング

【あらすじ】

墮落しきったこの世界を、俺たちが絶対に変えてみせる。

平和という二文字を求続けた人間、しかし実際に完全な平和を手にいれてしまった二十八世紀の人類には、それ以上何の発展もない、墮落しきつた生活が待っていた。

しかし、この平和ボケし墮落しきつた世界に焦りを感じた三人の若者がいた。

クールだが頭の弱い田中、短気で喧嘩早いが身長百四十五センチでガリガリの御坊、体脂肪率七パー・セント筋肉ムキムキ、まさに二十八世紀が生んだ筋肉マン、

だがいつもなよなよついたあだ名は『オトコオンナ』の山崎。

平和な世界を変えようと/orする三人、そんな彼らの戦いの火蓋が今、切って落とされようとしていた。

「じゃあまず、なにしようか」

地下に埋られたコンクリートの部屋の中で三人は話しあっていた。
「まずはよ、俺達の存在を世界にしらしめてやるぜ」

「そんなことどど、どうやってやるのよ」

「山崎、もうちょっと男らしくできないかなあ。

僕達はこれから世界を変えていくのだよ。その一員がそんなことどうする」

「うう、ごめんなさい、田中くん」

「もう、まあいいや」

一つしかない裸電球が照らす三人は、大きな溜息を吐いた。

しばらくの間コンクリートの箱の中を沈黙がただよつた。不意に山崎がいすからたちあがり、喋り始めた。

「いい考えがうかんだぜ。ジャックするんだ、テレビ局を」

「なるほど。ジャックとはなんだ」

「つまり、テレビ局に進入して、スタジオを乗つ取る。そしてカメラの前に立ち、俺達の存在を世間にしらしめてやるんだ」

「そそ、そんなことしたら犯罪になっちゃうんじゃないの」

山崎に見つめられた御坊は、とたんに静かになってしまった。御坊は低身とガリガリな体がコンプレックスなので、長身でムキムキな体を見ると、どうしても弱気になつてしまふのだ。

「山崎、いいかげんにしろ、甘つたれてるんじゃない。この今の世界ではな、正しいことが正しいとは限らない、間違いが間違ってるとも限らない。今は犯罪と言われても、長い目で見ればそれが正しいといふこともあるんだ。僕達は世界を変えようとしているんだ。このなんの危険もない世界は、生きるだけなら申し分ないだらうけれど、だめなんだそれでは、今の現状に満足して、向上心を失つたらすべて終わりだ。だから僕達は集まつたんだが、こんな世界を変えるために」

「ごめんな、ごめんね田中くん」

「泣くんじやない、男だろ」

「ごめんな、ごめんね」

「よしつ、まず何をするかは決まつたな。田中、テレビ局の地図を用意してくれ。山崎、前言つた制服、できてるか」

「うんん、でもあとちょっと、三十分もあれば縫い終わるよ」

「よし、頼んだ。俺は武器の準備をしてくる」

御坊がそう言いおえると、田中は奥の部屋へ地図を探しに、山崎は裁縫セットを作りかけの布きれを取り出し縫い始めた。

一方御坊は、武器調達に行く前に、トイレに行き鏡にむかつてなにかぶつぶつとつぶやいていた。

「はあー、俺だつてもう少し背が高くて、筋肉があつたら、田中みたいに山崎にビシッて言つてやれるのによ」

御坊は鏡を離れ、狭いトイレ内を、下を向きぶつぶつ言いながら何度も往復した。

ビシャツ。

水が肉を叩く音がした。御坊が顔を洗っていた。

「ああ、冷たい。よしつ、まずはこの計画を成功させないと」
御坊はそう意気込んで、トイレを後にした。

しばらくすると、地下室には三人すべての顔がそろっていた。
「よしつ、みんなそれつたな。では成果の発表」

「三人分の制服できたよ」

「よしつ」

「特殊警棒三本、スタンガン三つ、ナイフ三本、準備完了」

「よしつ、一人とも」苦労。じゃあ机にちかづいてくれ」

田中がそう言つと、丸められ筒状になつた紙を取り出し、机の上にひろげた。

「この世界にはもうテレビ局は各国一局しかない、無駄な視聴率争いを避けるためらしい。よく意味はわからんが、とにかく狙うテレビ局はこの『新日本テレビ』だ。新日本テレビは十四階建てのビル、入口は地下に一つ、僕達がねらつ昼の視聴率七十二パーセント番組『こんにちは日本』のスタジオは十一階、入口には一時間交代の警備員が常に二人いて、各スタジオにはエロカードがなければ入れない

「なるほど、ところで田中」

「なんだ質問か」

「なんでそんなにくわしいんだ」

「ボスに聞いた」

「なんだと、ボス」

「なんのよ、ボスって」

「自然発生的にこんな集団できるわけないだろ。僕達はボスに集められたんだ」

「何者なんだ、そのボスは。なんでお前しか知らないんだよ」

「この計画が成功したら、あらためて紹介するみたいだ。期待してゐつてや」

「ちつ、まずは成功させてからかよ。やつてやうじゅうじゅーか
計画はボスの指示どおりにたてられ、なんの問題もなく、実行の日
を迎えた。

三人は外装を真っ黒に塗られた、全部がスモークガラスの軽トラックに乗り、新日本テレビを目指していた。

「なんでフロントガラスまでスモークなんだよ、見えにくくて仕方ない」

「ごめんね田中君。歩行者とかに見られないようにと思つてぬつてたら、それになんかミステリアスな感じのほうが喜んでくれるかなつて思つて」

「ふざけるな山崎、運転しにくいんだよ。変わるか運転、変われないよな、お前免許ないからな、三人受けたのになんで俺以外みんな落ちてるんだよ。半分はコンピュータが自動で運転してくれてるのに、合格率九十八パーセントなのに」

「ごめんね田中君、ごめんね」

「泣くな山崎」

「おまえら俺をはさんで喧嘩すんなよ。その前に軽トラつて二人乗りだろ、狭いんだよ」

「じゃあ御坊は荷台に乗ればいいだろ」

「いやだよこんな制服来て公衆の面前を走れるかよ、さらしものじやねーか。なんなんだよ田中このデザイン、なんなんだよこのフリーフリ」

「ごめんね、御坊君が喜んでくれるかと思つて」

御坊の目に、山崎の木の幹みたいな腕が映り、少し口を「も」もさせたかと思うと、黙つた。

「だから泣くなつて言つてるだろ。もうすぐ着くから、ビシッとしてる」

「ごめんね田中君。わかつたから」

「わかればいいんだよ。よしあと約五百メートル、時間にして三分。

「御坊、準備いいか」

「フリフリの制服以外OK」

「よしつ、山崎は」

「うん大丈夫」

「よし、目標物が見えてきたぞ。気を引き締めろ」

これ新日本トレーナ駐車場へ

意気込んだ三人を乗せた車の前を、一本のバーが遮った。

「あんたら用件は、ADか」

「いやつ僕たちは、今日四時からの『素人お笑い全国各地から集まつて芸を見せ合ひみんなで笑い合おう』に出演するために来たものですが」

田中が予想通り、とこつよみがけた笑みを浮かべながら答えた。

「おうそうか、『苦労』苦労五つ九四五なんちつて。で、あんたらなんちゅう『ノンビ』や」

「いや僕たち三人なんでトリオです」

「おうそりかそりか草加煎餅なんちつて、すまんすまんスマトラ島なんちつて、で名前は」

「三人で『アンテナ』つて言つた前でやられてもらつてます。のっぽの僕が『バリ3』、そこのがたいの良い中くらいの背の奴が『なんだか少し不安』、こっちのちつこいのが『ほぼ圏外』です」

「ああん、誰がちつこいのじゃボケ。ああん誰が圏外じゃボケつ。んな話聞いてねえぞ」

「御坊君おさえて」

御坊の華奢なからだを山崎の筋骨隆々な腕がおさえると、御坊はしゆんと小さくなつた。

「おーうまいね、いい名前だ、いいねいいね胃粘液なんちつて。じやあがんばつてよ」

「はい」

田中は満足そうな顔をしながら、あいたバーの下を車でくぐり抜けて行つた。

「おいつ田中」

「どうした御坊」

「なんなんだ、そこのおつこいのは、『ほぼ圏外』つてのは、

馬鹿にしどんのかつ。特にひどいのが『ほぼ圏外』じゃ、なんじや『ほぼ』つて、わしゃ保母さんか、『ほぼ』つけられるくらいなら『圏外』だけでいいわボケつ

「いいじゃん御坊君。僕なんか『なんだか少し不安』なんだから。僕のほうが四文字も多いんだから、ね、ね、だから我慢して」

御坊は山崎に止められ、また口を『こもごもさせ黙つた。

その間にも田中は順調にタイヤをころがしており、車は駐車場の端のあまり人目に着かない所に止められた。

薄暗い地下の駐車場の端に置かれた、真っ黒で全面スモークガラスぱりの軽トラのドアが、小さな音をあげながら開き、中から三人が降りてきた。

「この2、しつかり覚えておけよ。僕たちが車をとめたのはこの2だからな、すつと乗つて逃げられるように、迷わずここにこれるよう覚えておけよ」

「了解。で、田中入口はどっちだ」

「右にずっと行って、突き当たりを左に真っ直ぐ歩いていけば、入口だ。その前に持ち物の確認」

三人は一斉にごそごそせやりはじめた。

「あるよ」

「あるぞ」

「よしそ、僕も問題なし。さあ行こう。で、どっち行くんだつけ」

「田中お前は馬鹿か、さつき左つて自分でいつてただろ」

「ちがうよ御坊君、右に行つて突き当たりを左に真っ直ぐだよ」

「御坊っ、馬鹿はお前だろ」

「つるせえ、んなことはどうでもいいんだよ。俺はさつきから血が騒いでしかたねえんだ、くだらないことちまちま話してないでとつとと行こうぜ」

三人はしつかり、右に行つて突き当たりを左に真っ直ぐ歩いた。すると、右手側に自動で左右にスライドし人を通す、大きく分厚いガラスが並べられていた、その前には制服姿のごつい男が一人、三人は無事入口を発見した。

「隠れる」

田中がそう言つと、三人は鉄筋コンクリートの柱の影に隠れた。

「ここでの一人の男に立ち入りを許可されれば、エドカードがもうかる。できるだけ暴力は避けたい、頭を使ってせめよう。

異議はあるか

「異議なし」

「ないよ」

「じゃあ着いて来い。つまく話を合わせておけよ」

三人はひそひそと小会議をひらき、意見がそろうと行動に移した。

「君達止まって」

「あつはい、止まります」

「君達用件は」

「はいっ、『素人お笑い全国各地から集まって芸を見せ合いみんなで笑い合おう』に出演するためにきました」

「ほう、証明とかできるかな」

「じゃあ触りだけ、のっぽの僕が『バリ3』」

「ちゅ、ちゅうくらいのわたしが『なんだか少し不安』」

「ちつちやな僕が『ほぼ圈外』。つてふざけるなつ、だれがちつちやな僕がや、なにが圈外や、ふざけんな」

「さ、さんになん合わせてアンテナでーす」

「おお、身長が大中小だからアンテナねえ、なかなか面白いじゃないか。じゃあこれがIDカード、これで『素人お笑い全国各地から集まつて芸を見せ合いみんなで笑い合おう』のスタジオに入れるよ。がんばつてよ」

「あつ、ありがとうござります」

三人は駐車場中に響き渡る声でそう言つと、扉の向こうに歩いて行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8943a/>

革命者

2010年10月9日21時02分発行